

# memo

2008(平成20)年6月8日鑑賞<宣伝用DVD鑑賞>

★★★



監督・脚本＝佐藤二朗／出演＝韓英恵／佐藤二朗／宅間孝行／高岡早紀／岡田義徳／池内博之／白石美帆／太田善也（グランデ、AMG エンタテインメント配給／2008年日本映画／106分）

……メモをとらなければ「発作」が治まらない。それが「強迫性障害」という精神障害。そんな障害の実態を映画にぶつけ、観客に示したのは、自身が「メモ障害」をもつ佐藤二朗監督。映画に共感できるかどうかのポイントは、そんな「強迫性障害」に対して、あなたが理解と共感を覚えられるかどうかだが……？

## 強迫性障害とは？

ネットの『ウィキペディア』によれば、「強迫性障害」とは精神障害の1つで、不潔強迫（手の汚れが気になり、手や体などを何度も洗わないと気がすまない）や確認強迫（外出や就寝の際に、家の鍵やガスの元栓、窓を閉めたかが気になり、何度も戻ってきては執拗に確認する）の他、加害恐怖、被害恐怖、自殺恐怖や保存恐怖などさまざまなパターンがあるとのこと。しかし、この映画が描くのはタイトルどおり「メモ強迫」。つまり、日常生活の中であるタイミングがくると、紙にメモをとらなければいけないという衝動が起こる強迫性障害だ。

そんな症状をもった女子高生本橋繭子（韓英恵）は発作がいつ起こるか全くわからないから大変。しかも、ペンと紙があってメモをとれば症状は緩和するが、それが無い場合は、爪で自分の手や足に書かなければダメというからかなりヤバイ。そんなヒロインを父親が韓国人、母親が日本人という個性派若手女優、韓英恵が熟演！

## 監督自身の体験的問題提起だが……

私は全然知らなかったが、この映画が監督初作品となった佐藤二朗は、『SMAP ×

SMAP』に出ている、顔が下駄みたいな俳優(?)として割と有名らしい……? そしてビックリしたのは、彼自身が、メモをとらなければどうしようもなくなる「強迫性障害」者だということ。したがって、この映画は彼の体験的問題提起!

もっとも、プレスシートによると、『映画で強迫性障害に苦しむ人たちに勇気を』なんてこと僕は考えてない。僕は僕のためにこの映画を撮った』とのこと。しかし、チラシに書いてある反響は、「全国の悩みを抱える働く女性たちが熱く支持!」「小さい声で悩みを叫ぶ、これはわたしたちの映画です。」だから、やはりそういう精神疾患をもった人たちの共感がこの映画を支えているわけだ。もっとも、佐藤二郎監督は同時に「しかし万一、万々一、『少し前を向いてみるか』という気持ちに、たった一人でもなったとしたら、ほんのちょっとだけ、“元”が取れるような気がする」と述べているから、やはり腹の底では、「強迫性障害」への共感と理解を願っていたのでは……? したがって、逆に言うと、そういう精神疾患に関する共感や理解がない人たちには、この映画は違和感いっぱいに見えるのかも……? そして、正直に言えば、私は後者の方……?

### 物語は、純平の登場からだが……

映画の冒頭は、繭子の「症状」を紹介するシーンから始まる。テストの時、合唱の時、バスケの練習の時など、発作は時と場所を選ばずおこるから、そのたびに繭子は大変。物語が始まるのは、自宅のベッドで朝繭子が目覚めると、隣りにある男が眠っていたこと。これには繭子はビックリだが、実はその男は、長い間音信不通だった父親洋平(宅間孝行)の弟の純平(佐藤二郎)だったから、なおさらビックリ。

学校での大江先生(太田善也)のテスト風景や授業風景も私には異常としか思えないが、この純平のしゃべりを聞いているととにかくイラつくことおびただしい。そんな「強迫性障害」をもった男を、脚本を書き監督した佐藤二郎自身が演じている。それが熱演であることはよくわかるのだが、真に迫った熱演であればあるほど、それを観てイラついてくるから始末が悪い。ひょっとして、私にはこんな「強迫性障害」の患者に対する思いやりの気持が薄いのかも……?

### 生活レベルは? 両親の仲は?

繭子が住んでいるのは閑静な住宅地の一戸建て。また、父親は毎日ネクタイを締め

て出かけているから多分普通のサラリーマンで、年の頃は45歳前後。その年でこんな立派な家に住んでいるのだから、収入は中の上……？ 他方、おっとりした母親の道子（高岡早紀）も、お金のためにパート勤めをしている様子はない。そして、やさしく繭子の病気と向かい合っているようだし、夫との仲も問題なさそう。もっとも、私の目にはこの父親が冒頭に見せる言動に多少違和感があるが、その程度のことは仕方なし。こんな何の問題もない両親の下に育ちながら、なぜ繭子は強迫性障害に……？ それとも、私には見えないだけで、やはりこの父親と母親そのものに、あるいは彼らの子供の育て方に何らかの問題があったの……？

### こんなカウンセリングでオーケー？

繭子の「強迫性障害」は学校ではヒ・ミ・ツ……。したがって、繭子が急に異常な行動をとっても周りの生徒たちはそれを取りたてて問題にしていないし、先生たちもそれに対して特に手を打っている様子はなく、放置したまま。

他方、繭子はバスに乗って女性カウンセラー（白石美帆）の元をたびたび訪れているが、私の目にはこの女性カウンセラーの対応もどこかいい加減。私にはそう映ってしまうのだが、カウンセリングは患者の思いどおりにしゃべらせることが大切だから、こんな風に相槌を打って、ただ聞いておけばいいだけなのかも……。ここらあたりがじっくり理解できないのも、この映画を観ていて私のイライラが募る原因に。

### 繭子は病を乗り越えることができるの……？

こんな問題提起型の映画についてはネタバレは厳禁だが、中盤のハイライトは、互いに強迫性障害であることを認識した繭子と純平との奇妙な対話（？）の数々。同じ強迫性障害でも、ぶっきらぼうで口数の少ない繭子のしゃべり方と、機関銃のように言葉をくり出す純平のしゃべり方とは全然異質。しかも、しゃべっている話題は必ずしもうまくみ合っていないことが多い。それでも、そんな対話の積み重ねによって2人の親密度は次第に増していったようだ。ところが、ある日、ある事件が起きたからその後は一体どんな展開に……？ この映画の第1のテーマは、繭子を通じて、さらに純平を通じて強迫性障害という精神疾患とはどんなものかを観客に伝えることだが、第2のテーマはその克服は成るのかどうかということ。しかして、この第2のテーマがどうなるのかは、あなた自身の目で……。 2008(平成20)年6月13日記